

早稲田大学 文化構想学部 国語 講評

〔総合分析〕

出題形式	マーク式・記述式併用
試験時間	90分(現代文2問、現古漢1問)
難易度	昨年比、やや易化

〔大問別講評〕

(一) 評論文。「『書は美術か?』」について。

出典:A:栗本高行『墨痕 書芸術におけるモダニズムの胎動』。

B:小山正太郎『書ハ美術ナラズ』。

《本文字数:約 5500 字＝昨年より約 500 字減少。設問数:7＝昨年より1問増加。》

小問	難易度	コメント
問一	やや易	【空欄補充】aでハ・ホに絞り、bの「ドグマ」でホを消去できる。cは「超越的」と対義的な語が入るので、ここでも容易に判断できる。
問二	標準	【根拠理解】直前の「ここ」という指示語に着目。「拙い文字でも内容が優れていれば人を感動させる」という内容である。その根拠を選ぶ。
問三	標準	【傍線部説明】傍線部を含む段落内容から容易に判断できるだろう。
問四	やや難	【空欄補充】空欄甲には「意味内容」という意味の語句が入る。問二もヒントにはなるが、解答が傍線部中にあり、かえって発見しにくかったかもしれない。
問五	標準	【脱落文挿入】直前には「迷霧」に陥っている「世論」が示されているはずである。
問六	標準	【趣旨理解】イはBの23～24行に明らかに反する。
問七	やや難	【趣旨合致】ロと迷うが、Aについて文字の「本質」を「抽象的な造形表現にある」とする点が誤り。文字には「イメージと言語」の両面があることを前提としている。イはBについて、ニはAについて、ホはAについてが、それぞれ不適切である。

(二) 評論文。「一点透視図的世界観」について。

出典:鈴木一誌『ゲームの規則』。

《本文字数:約 2200 字＝昨年より約 300 字減少。設問数:8＝昨年と同じ。》

小問	難易度	コメント
問八	やや易	【脱落文挿入】直前には「経験を積んだ人間の言動」が示されているはずである。
問九	やや難	【傍線部理解】「〈知り合いの輪〉」では、傍線部Aの2行前の「人間は他者との関係に応じ」てとるべき「距離」が「無いもの」とされている。それは「『個体間距離』」という概念の何に当たるかを考える。
問十	標準	【傍線部理解】傍線部Bの直前にある。ただし、設問の「文」という表現は「一文」と理解されてしまうおそれがあり紛らわしい。「部分」という意味で使われることがまれにあることを知っておこう。
問十一	標準	【空欄補充】Iは文脈から容易にわかる。IIは祭では満員電車と違って人々が何を意識しているかを考え、判断する。
問十二	標準	【傍線部理解】3行後に「(わたし)を中心とした世界観」とある。ハは「別の」が誤り。
問十三	やや難	【理由説明】傍線部Dから文章末尾までの内容から判断する。特に最終段落の第一・第二文が重要である。
問十四	標準	【趣旨合致】ロは21～22行に合致。他はそれぞれ後半の内容が不適切。
問十五	易	【漢字書き取り】いずれも基本的な語である。

(三) 甲＝現古融合文。古代人と夢について。

出典：甲＝西郷信綱『古代人と夢』。乙＝『蜻蛉日記』下巻。丙＝『過去現在因果経』。

《本文字数：合計約 3400 字＝昨年より約 600 字減少。設問数：10＝昨年と同じ。》

小問	難易度	コメント
問十六	易	【文法】助動詞を選ぶ。ハとへはともに「ぬ」である。基本中の基本。
問十七	やや易	【傍線部理解】前の「星移り…滔々みなこれだ」とのつながりから判断する。
問十八	標準	【空欄補充】直前の「事象を時代…見ることで」が解答根拠。
問十九	やや難	【傍線部理解】傍線を含む一文が前文の理由を述べた文であることに注意。消去法が有効である。
問二十	易	【文学史】『蜻蛉日記』が『源氏物語』より以前の平安中期に成立したことは、文学史の基本知識。ロは平安前期に成立した日本最初の勅撰和歌集。
問二十一	やや難	【傍線部理解】『今昔物語集』と『源氏物語』の登場人物は、見た夢を信じるという点で文化の一つの型を示しているという内容。
問二十二	標準	【内容合致】ロは3～5行目、ニは6行目にそれぞれ合致する。ハは「たちどころに」が不適。
問二十三	標準	【返り点】傍線までの内容、及び、「於」「為」の用法を意識する。
問二十四	やや難	【空欄補充】空欄を含む一文末までの内容をふまえて判断する。
問二十五	やや難	【内容合致】ホが紛らわしいが、説話文学でないことと極楽往生する物語の作りやすさを因果関係で捉えている点が不適。

〔総合コメント・今後の指針〕

全体的に昨年よりやや易化した。昨年よりはやや減少したものの相変わらず分量が多いので、時間との戦いになるだろう。大問一は例年通りの二つの文章を並べる形式である。大問一は解くのに時間がかかるので後回しにして、大問二と大問三を解き終えてから取り組んだほうがよい。大問三の甲では現古融合文が出題された。

大問一は、『書は美術か?』についての評論文。昨年よりやや易化したものの、約 5500 字の長文である。Bが 12 年と同じく片仮名交じりの文章だったが、Aの主旨がつかめていれば内容は容易につかめる。設問は問四・七以外が基本・標準レベル。全体の時間配分がうまくいき、この大問に時間を確保できていれば得点できただろう。

大問二は、「一点透視図的世界観」についての評論文。昨年より易化した。設問は問九・十三以外が基本・標準レベル。高得点を狙いたい。

大問三は、「古代人と夢」についての現古融合文とそれに関わる古文・漢文。昨年よりやや難化した。全体の本文字数は昨年より減少し、15 年の水準に戻ったものの、漢文が長文化したので漢文の学習を疎かにしていた受験生は時間をとられたかもしれない。